

お祝いの辞として



ご入学おめでとうございます。

いよいよ、大学生活のスタートです。皆さんは、どのように過ごそうと考えているのでしょうか。

小学校入学時、私は母親から「先生の言うことをよく聞きなさい」と言われました。当時は、ただ言われるがままで、その意味を深く考えませんでした。今では、「話を聞く」とは、情報を得ることだと理解しています。

人生は一度きりですから、あらゆる場面が初体験です。そんな未知の道行きであるにもかかわらず、「右へ行ったらどうなるか」「左へ行ったらどうなるか」迷った際に、さほど深く考えず、ただの勘で決めてしまうことがあるような気がします。

とはいえ、その選択によって、人生が大きく左右されることもあり、それまでの経験値では判断を躊躇するケースもありそうですし、また、一旦は、勘で「こっちだ」と決めた後に「もっといい道があった」と悔やむこともありそうです。

そこで、労せずして成功しているように見える人を「勘がいい人」＝「才能のある人」と考えて、羨んだり、素質の所為にしがちです。

しかし、物事の判断には自身の少ない経験や勘だけでなく、科学的な視点、客観的な分析によって人類が蓄積した「情報」を利用することも有効です。

人類には長い歴史がありますから、先輩たちが実体験して価値を認められた確かな情報を入手しておけば、同じ轍を踏むことは避けられます。

困った時に「何かいい手はないか」と、過去の情報を探るのが「勉強」という行為で、そうした情報や、情報の入手方法を知るチャンスがあるのが、「学校」というシステムだと思います。ポイントは、必要な情報の在処を知っておくことです。

昨今、コスパ、タイパのよさを追求することが流行っているようですが、自身の環境に経済的、時間的な条件が存在するならば、なおさら、事前の情報収集は重要になります。

けれども、中には、かつて誰も経験したことのない場面に遭遇することがないわけではありません。

「それが何か」、誰も知らない。

「どうしたらいいか」、誰も知らない。

世の中には分からないことが、まだまだ沢山ありますし、これからも発見されるでしょう。人類にとって初体験のことには記録がありませんから、思い出そうとして頭に浮かんでくる過去の情報などありません。そこで私たちは「考える」という作業をします。これが「研究」という行為です。

大学は、そうした未知の事象についての謎解きに興味がある人たちが集まっている場所です。そして、それぞれ専門とするテーマについて研究してくれる後輩たちを育成する機関でもあります。

この「勉強」と「研究」を区別せずに「勉強」と称してしまう向きもありますが、両者の違いを意識しておくことが、1年生としては肝要です。

文学部の皆さんは、4年生になると、学科によって異なりますが、卒業論文、卒業研究、卒業課題といった研究の成果をまとめることとなります。

一般的に、「勉強するステージ」から、自分が興味を持ったテーマを見つけて「研究するステージ」に進み、考察の結果を新たな情報として記録することを初めて実践するのが、4年生の課題です。

学生生活のメインは、自分の研究テーマを見つけることにあると言ってもよいと思います。

人には個性があり、これまで過ごした時間の内容もまちまちですので、自分のペースで構いませんから、1年生の4月あたり、まずは、これからの時間をどう使うかイメージして、一段一段、ステージを進めていくことを期待します。



令和8年4月4日

文学研究科長・文学部長 小林 恭治

